

基調講演 1 テーマ「米国のUD最前線」

カリフォルニア大学サンタクルス校文化研究センター研究員
スコット・レインズ氏



皆様、こんにちは。本日は古瀬敏教授のお招きで皆様とお話することができ、大変感謝しております。

今回の講演では、米国での現在のユニバーサルデザインの展開状況に関してと、先日、アダプティブ・エンバイロメント・センターが主催いたしました、リオデジャネイロでのユニバーサルデザイン世界会議のハイライトをお話しようと思っております。

そして、特に私が興味を持っております観光業、サービス業、UDという観点からの幾つかの事例をお話したいと思います。

ユニバーサルデザインという概念、目的は、製品、施設、情報、サービスなど、能力差のあるできるだけ多くの方々に使用していただけるような製品や施設、物、情報、サービスなどを提供することです。その一方で大切なのが、信義性を損ねない、その物やサービスや施設などのスタイルを損ねない、使用する方に屈辱感を与えないように配慮することが大事だと考えております。今回は、ユニバーサルデザインの定義として、先ほど述べましたアダプティブ・エンバイロメント・センターの取り上げております7原則を前提としております。

私の講演を3つの部分に分けたいと考えておりますが、第1部はデザイナーとユーザーの関係。第2部はUDの理論及び研究における先の進捗ですね。第3部は具体例の紹介という形になります。

UDという概念ですが、例えば製品、施設、情報、サービスなどの創出に当たって、倫理的な視点を与えるものであり、世界各国において、もう大分根づいております。成熟してきたということで、各国でさまざまなバリエーションが登場しています。今回、この機会を借りまして、先日のリオデジャネイロでのアダプティブ・エンバイロメント・センターの会議のトピック等を織り込みまして、アメリカでの現在の展開を説明していきたいと思っております。

ユニバーサルデザインの倫理的な手段

第1部、まずこのユニバーサルデザインの倫理的な手段についてお話ししたい理由があります。世界各国、各地域において、実際のユニバー

サルデザインの取り組みは表面的に見るといろいろな差があるわけです。この表面的な差が一体理論における実質的な違いというものを示しているものかを理解する上で、ユニバーサルデザインの倫理面にテーマを絞って話すということは意義があると思います。またこのユニバーサルデザインの倫理的手段について話すことで、今後UDの製品を開発し研究する上で助けとなる幾つかの流れを御紹介できると思うわけであります。

議論を始めるに当たり、3つほど、疑問を設定しておきたいと思いません。最初の疑問は、使用者とは誰のことなのか。2つ目、使用者の持つ価値とは一体何のことなのか。3つ目、使用者に対する我々の倫理的な責任というのは何であるのか。これら3つの疑問にこれから答えていきたいと思いません。

使用者とは一体誰なのか

使用者とは一体誰なのかということではありますが、この疑問に関しては、ユニバーサルデザインの創始者の一人であるロン・メイス氏が、新しいデザインのアプローチをつくり出すことが重要であると言っていました。ユニバーサルデザインでは、使用者というのは、まず第一に消費者であると規定しております。これがロン・メイス氏の考え方です。

実際には国あるいは地域ごとの取り組みに応じて、その主要的な観点から見た焦点が、最初の使用者イコール消費者というところからずれてきているわけであります。そうした流れを2つ御紹介したいと思いません。

まず1つ目。ラテンアメリカにおいては、障害のある方を消費者として定義することに疑問を感じているようです。彼らの国では、大きな貧困者層があり、彼らは購買力がないわけです。この点が重要なリオでの会議の成果として上がってきたドキュメントにも反映されています。

このドキュメントは、リオ宣言と銘打たれており、持続可能で包括的なユニバーサルデザインという宣言文があります。ここではユニバーサルデザインとは、貧困者層の方にとっても利用可能であり、それが環境に与える影響にも配慮したものでなければならないと主張されています。

一方で、ヨーロッパ連合、EUにおいてはまた違う考え方があり、国連で提供しているようなある倫理観、倫理面での議論を取り上げたいと、国連の考え方とを好む傾向があります。リオでの会議におきまして、ナイアウ・フィージェー・ウォウシュというアイルランドの方から、ユニバーサルデザインの倫理面での手段を理解する上で重要な発表がありました。彼が言うには、建築士がその使用者に対する敬意を払うためにも、国連の人体実験防止条約を適用する必要があると述べておりました。

この2つのどちらも、その焦点が、当初の消費者から、市民に移動して、消費者の権利から市民の権利というふうに移っています。

日本で、あるいはアジア全体でのアプローチはどのようなものなのか、よく知りませんが、知っているのは、家族というものを大切にしているということです。これは米国の、焦点が個人主義に向かっている傾向と対比しますと、うまくバランスがとれているように思われます。しかし、こういう日本やアジアの抵抗があるために、日本のビジネスの方にとっては、障害のある者を社会に完全に参加させるような製品や、政策を打ち出し、開発していく点で、困難を伴っているのではないかと思います。

このユニバーサルデザインを必ずしも障害のある方々ではなく、高齢者の方々のために適用していくという面では皆様の国というのは世界のリーダーであると思います。

使用者の持つ価値

使用者の持つ価値とは何でしょうか。使用者とは消費者のことです。

ユニバーサルデザインを推進していく過程において、使用者というのがアメリカ人のエレン・オストロフという方が数年前にも書いているように、重要な本質的な要素であります。彼女はその著書の中で、新しい言葉として「専門家としての使用者」という表現を示しています。

このデザインをしていく、製品を生み出していくというスタイルに使用者が関係してくる段階が2つあります。1つは計画の段階。もう1つは販売の段階です。前回の国際会議でも大変良かったのは、日本の例えば三菱とかTOTOの方が、エレン・オストロフの「専門家としての使用者」という原則を、周到に発展させていることです。

「専門家としての使用者」という中で、個人の価値というのは、デザインの指針を与える。デザインの手引きをしていただけということ。そしてもう1つが、その製品を購入していただけるということがあります。この2つが使用者の持つ価値です。

使用者に対する我々の責任

使用者に対する我々の責任というのは一体何でしょうか。使用者イコール消費者です。米国での最近の発展状況をお話します。

UDの7原則というのは、デザインや製品が安全で、すべての方にとって使用可能であり、また理解しやすいものであるということを求めています。我々はこの使用者を依拠しているわけですが、製品のデザインを行う上で使用者は本質的に重要です。我々は彼らの経験に敬意を払い、

基調講演 1. テーマ「米国のUD最前線」

配慮しながら、そこから情報を得ていく必要があることを意味している。

その一方でさまざまな地域において、特に別の観点からある利点が置かれています。例えば市民権を重視する傾向、あるいは社会・経済的な状況を重視する傾向。あるいは環境に対する配慮を重視する傾向。これら地域独特の傾向が、先ほどのUDの7原則を補っていると私は考えております。



ユニバーサルデザインの理論

第2部ユニバーサルデザインの理論についてお話ししたいと思います。

米国における新しい展開によって、UDの理論面でも、実践面においても大きな影響が与えられると考えております。アダプティブ・エンバィロンメント・センターが、新しい研究機関を設けることになり、有機化学的研究を主に行っていくことになっております。

この研究機関に関する公式な発表は来年の1月を待たなければなりません、2つのことを主に研究していくということを申し上げたいと思います。

学習のためのUD

まず1つですが、UDLというふうに略称で呼ばれております。学習のためのUDですが、これまで米国ではキャストという機関によって先駆的な研究がなされてきました。

アンビオセクション（外界認知）

2つ目の研究対象が、私がアンビオセクションと呼んでいる概念であります。「外界認知」と訳しておきたいと思っております。我々が自分たちの目的地に至るために、その経路を見つけ出す能力とその判断を行う際の認知的な過程を研究対象にしようということです。

もう少し具体的に述べますと。視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚、そして位置と平衡の感覚。この6つの感覚を統合して、個人個人において統合していく過程を研究していくことです。

最後に述べた、位置と平衡の感覚とは我々の身体が空間においてどこに位置しているのかを知る能力であり、具体的には、身体各部の協調的な運動とか、統制のとれた運動、そして優雅さ等々として表れます。こ

の位置と平衡の感覚というのは、身体を通じて得られた感官知覚に基づいて、空間的な位置を把握するということですが、先ほど述べたアンビオセクション、外界認知に係わってきます。

この外界認知とは、我々の身体の位置、そして我々が空間を通じて行きたいところに行く、実際にたどることのできる経路を、位置と平衡の感覚も含めた6つの感覚に基づいて知的に判断していく作業であります。この能力を研究しようということになるわけです。

アンビオセクションの研究によってどんな恩恵が得られるかといいますと、我々に理解しやすい構築環境をつくる上で助けになるということ。例えば、非常時、火事、地震、津波などの状況においてより安全であり得るような環境をつくることのできるわけです。この研究は米国が世界に先駆けて行っている分野であり、ユニバーサルデザインの倫理的な視野からいっても、非常に重要な意義を持つものです。

ユニバーサルデザインの具体例

第3部。具体例を紹介したいと思います。

私の4人の同僚のプロジェクトを紹介したいと思います。（スライドを見ながら）最初は、センター・フォー・ユニバーサルデザインの所長、ローリー・リングート氏のプロジェクトです。

残念なことに、このセンター・フォー・ユニバーサルデザインですが、連邦の資金援助を受けることができなくなり来年の1月には閉鎖されることになりました。これは、米国におけるユニバーサルデザインと構築環境の研究にとっては大きな打撃、大きな問題であると思います。

まずモデル住宅であります。これはニュージャージー州のアトランティックシティに設けられております。

2つ目の例も、先ほどのセンター・フォー・ユニバーサルデザインの事業であります。やはりモデル住宅です。この事業で「パレード・オブ・ホームズ」という雑誌の金賞を受賞しました。通路で家の各部を、戸外に出ることなく結びつけているわけです。ある意味で守られた環境ということですが、例えばこの家のガレージと母屋の部分がこの通路でつながれているという次第です。

この事例は、ハビタット・フォー・ヒューマニティーという団体のつくった住宅ですが、この団体の用意しておりますユニバーサルデザインに基づくフロアプランを標準として取り入れております。ハビタット・フォー・ヒューマニティーという団体は、貧困者向けの住宅を提供している団体ですが、世界各地で活動しております。フロアプランで、貧

困者、低所得者が使うことができるというだけでなく、素晴らしいデザインなんです。このコミュニティーの内部で貧困者向けに建てられた住宅が、モデル住宅となったわけであります。

ハビタット・フォー・ヒューマニティーの提供している住宅は、特に貧困者層の障害のある方々にも利用しやすいものですが、ビジタビリティという概念をも取り入れているということ。すなわち訪問しやすいというコンセプトが含まれているわけです。ここに住む障害のある方々にとって住みやすいというだけではなくて、ここを訪問する方にとっても、居心地のいい訪問先となるコンセプトがとられているわけです。

これがポフト・オブ・スタンシー・エバリュエーション、例えば公共の集合住宅などが建てられ、そこに実際に住人が住むようになった後で、その評価を行うということです。この建物の住民の評価によると、この集合自由宅には、障害のある子どもたちが障害のない子どもたちと交って遊ぶ場がないと指摘され、この公園がつくられたわけであります。

先ほどの写真とこのスライドでお見せしているのは、スーパーマーケットの中で支払いを行う車いすの利用者ですが、クレジットカードの差し込み口が手を思いっきり伸ばしても入れにくい。そこで、こうした車いすを使う方の動きを研究しまして、彼らにとって使いやすい形のものデザインしました。

次にジョン・ソルマンさんの作品です。重要な点は、この引き出しに手が届きやすいということ。車いすを使用しておりますと、手が届かないので一番下には引き出しがついておりません。

このような住宅を見る際に、常識になっておりますのが、ガレージから上がってくる際のエレベーターの設置

です。こちらが障害を持つ人にも使いやすいバスルームの例です。残念ながらTOTOのものではございません。こちらの家ですが、この砂漠のような環境に非常に適した素材でつくられております。日干しレンガの住宅になっております。熱に耐える素材を使う必要があります。もともと先住民のインディアンが使っていた素材でして、周囲の土に対する彼らの敬意の念というのが感じられます。周りで調達できる材料、素材を使った家の例でございます。

最後の例として、カット・ダルダさん、ロザンヌ・ラモスさんたちが



行っているものは、世界で最初のバリアフリーのエスコロッチの開発です。場所はアメリカのバージン・アイランドで、エステート・コンコルディアというところですよ。それで「誰でも利用できる 21 世紀型リゾート」という名前にしてあります。このプロジェクトでは、ユニバーサルデザインの考え方をを使うだけでなく、倫理的な面から環境を考慮し、また現地の社会、あるいは社会文化への貢献というのを考慮したプロジェクトになっており、今後のモデルになるものと期待されております。

ニーズとマーケット

障害を持つ人たちの旅行のニーズがどのぐらいのマーケット規模なのかということですが、マーケット・ポテンシャルは大きい。しかも手つかずの分野となっております。シカゴにあるオープン・ドアズ・オーガニゼーションの調査によりますと、2000 年の段階で、アメリカには障害を持つ人たちが 4,200 万人おりました。その人たちが旅行のために使うことのできる可処分所得は 125 億ドル。そのほとんどが使われない状態であるということがわかりました。このような市場があるということに加えて、もちろん現金を持ち、旅行したいという意欲のある高齢者の市場というのもございます。



例えば皆さんに、私のように障害があり、アメリカ人で、日本で使ってもいいというお金があるものとして、誰でも参加できるインクルーシブな旅行をぜひつくっていただきたいと思います。誰でもが行けるユニバーサルデザインを駆使した旅行先を開発する業者の方をぜひ探してください。そういうところがあれば、私はまたこの美しい国に、今度は休暇で戻ってきたいと思います。どうもありがとうございました。（拍手）

基調講演2 テーマ「超高齢化社会におけるUD」



静岡文化芸術大学教授 古瀬 敏 氏

日本の急速な高齢化、この先もさらに高齢化する状況において、ユニバーサルデザインがどういう意味を持つかという話をいたします。

ユニバーサルデザインの概念

ユニバーサルデザインは基本的に、すべての人のためのデザインです。以前はバリアフリーデザインが非常に重要だと言われていましたが、実際にはそれは障害者に焦点を当て、特別な対応をするという意識が抜けなかったわけです。現実に特別な対応であるし、すべての人を意識していると言われたこともあります。中身は、障害者という対象から目が離れていないと言えると思います。

ところがユニバーサルデザインは、先ほどの講演で、7原則が投影されておりましたが、その中で、年齢、性別、能力などのいかにかわかわらず、使えるものでなければならないという表現になっています。ここで重要なのは、「能力などのいかにかわかわらず」という記述であり、この7原則を読んだ人が、英語から日本語に訳すときに、「障害の有無にかかわらず」と訳語がつくられています。

ユニバーサルデザインの概念は、実は障害のあるなしで区分してほしくない、そうすることは実はマイナスだと強く主張した概念だと申し上げたいと思います。障害があるなしで区別をすることがもともと間違いだ。すべての人が使える、満足を与えるものでなければならない、これがユニバーサルデザインの原則であります。

新幹線で・・・

私はスコット・レインズさんを出迎えて、一緒に成田エクスプレス、新幹線を使って浜松まで来ました。このときに、いかに新幹線の車両がユニバーサルデザインの概念からかけ離れているかということを経験いたしました。切符を買うときに、「一緒ですか」と聞かれて「はい」と答えたものですから、隣り合った席をもらったのですが、これが最大の間違いでした。成田エクスプレスには、車両の片側の入り口に、真ん中の

通路側の座席を取り外した車いす対応のスペースがあります。「車いす対応でお願い」と言っていたら、その席を売ってもらったはずでしたが、「一緒」と言ったために、車両の真ん中のA、Bと並んだところをもらったわけです。通路が非常に狭いが辛うじて通りました。席の脇まで持って行って座席に移って、車いすを畳みました。

便利な品川まで行き乗り換えましたが、彼の車いすが、新幹線、普通車両の通路を通りません。車掌さんが来て、11号車の個室に移りましょうと。ところが11号車から遠いデッキだったので、新幹線の通路が通れる折り畳みの車いすを持ってきて、車掌さん2人が肩で支えて移して、彼の車いすは折り畳んで個室に移動したというわけです。

旅行して、一緒に席に座りたいという希望は、現在の仕組みではほとんどかなえられないということです。新幹線、成田エクスプレスの全体の仕組みは、ユニバーサルとはほど遠い。特に新幹線は設計時点が古いこともあり、非常に遠いということがわかったわけです。

差別禁止

ユニバーサルデザインは、米国で提案された言葉です。実際には差別禁止と強く結びついています。ただ、この言葉自体を持ち出したことで、意識的に差別禁止を強調するのを避けています。それは1990年に成立したADA、いわゆるアメリカでの障害者の差別禁止法が成立した後の現実を踏まえています。障害の有無による差別は禁止するという憲法に基づく公民権、米国国民の権利としては認められましたが、物事は必ずしもすぐには変わらない。よりよくすることが、障害を持つ人のためだけではない、実はすべての人のためになるんだと前面に押し出すことによって、人々を説得しようとした。だから障害を持つ人が、私のためにしてくださいということではない。あんただって役に立つよ、あんただって実は不便をしているだろう、困っているだろうと仲間に引き入れようという考え方が、実はこの根底にあります。

ユニバーサルデザインという概念は、海外でも日本でもずっと進んでまいりました。特に海外では、ADAとか、オーストラリアのBDA、障害者差別禁止法、イギリスでの障害者差別禁止法BDA、ノーマライゼーションなどという概念と相まって動いてきたわけです。ただヨーロッパでは歴史的な流れから、インクルージョンという言葉を使うことが多く、特にイギリスでは、インクルーシブデザインという言葉を使うほうが一般的です。それに対してアメリカではユニバーサルデザインという言葉を使っていますが、これは米国では、論理を振り回すよりは、実

基調講演 2. テーマ「超高齢化社会におけるUD」

用的に迫って行って多数派を形成しようという思惑が込められています。日本でもこのことが意識されるようになったわけです。日本の場合は実は人口の高齢化が一番寄与しています。

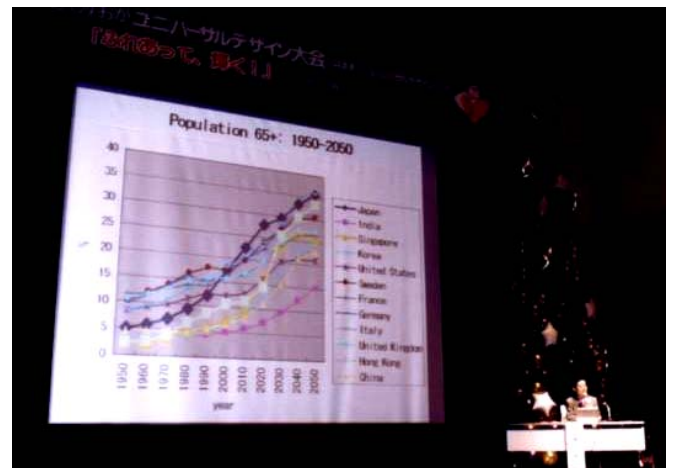
超高齢社会

幾つかの国を挙げましたが、その国において人口構成の内 65 歳以上の割合（パーセント）を 1950 年から 2050 年まで、大体過去 50 年、将来 50 年間の 100 年間の変化を示した図です。1950 年に 3%位の国が一方ではあり、既に 1950 年に 12%近いところまで上がっている国があります。1950 年位に 10%、それ以上という国は大体が西欧の先進国、緩やかに変化し、2050 年には 20%を超えるところから 30 ぐらいに移行する。スウェーデンという高齢化先進国を、日本はいつの間にか追い越しているわけです。

日本の傾向を見ますと、1950 年には 5%、20 人に 1 人は 65 歳以上の高齢者でした。1970 年に 7%、1994 年に 14%、そして今年（2014 年）は 20%を超えようというところでは、予測では 2014 年に 25%に達する。この 2014 年は、団塊の世代が全員 65 歳に達する年です。その 25%を超えても、もっと上がるのが日本の状況で、2050 年は 36%位まで行くと推測されています。

韓国は 4%ぐらいから進んで、2050 年には 25%まで行くとなっています。ただ、高齢化の速度は日本を上回る瞬間があると言われています。7%から 14%までは 22 年間で達成すると言われています。中国が、韓国よりちょっとずつ遅れて高齢化しています。韓国と中国の一番高齢化が進む速度を見ると、勾配がほぼ同じ。要するに 20 数年で 7 から 14 に駆け上る速度ですが、この 2 つの国については、いいことが 2 つあります。日本よりほぼ 30 年遅れて日本の速度にたどり着き、日本の割合をなぞるということと日本に比べると「いす」の文化があるということです。

それからインドです。2050 年でも 15%、7 人に 1 人は 65 歳以上の高齢者。人口大国中国、インドも数十年後には高齢者大国になります。WHO の有名な言葉があります。先進国は豊かになってから高齢化した。途上国は豊かになる前に高齢化がやってくる。このインドの数字は、まさにそれを示していると思います。



身体的能力

超高齢社会になって何が問題なんだ。不老長寿が一番めでたいことだったのに、そうではない。年は争えないということを示したのがこの図です。縦軸に能力をとっております。ただ相対的に言えば身体的能力であって、知的能力はここでは議論しないことにしています。

横軸に年齢がとっております。0歳から20、40、60、80と20年刻みでとりまして、0歳のときには、能力ゼロと書きます。子供が10代半ばぐらいでほぼ大人の能力に比べて20代、30代、40代、50代にくらいまではぴんぴんしてる、というのを普通は考えます。この世代は重たい荷物を持って汗をかいて労働することが果たせると考えられています。

実は長い間、55歳以上はもはや労働者としては考えていなかった。ちょうどその頃に、体力が落ちたなといやでも認識させられ、肩たたきの世代になると言われてきたんです。通勤電車でもまれて平気な世代に最適な環境は、そこから押し出された世代には必ずしも快適ではない。それに対してユニバーサルデザインという概念が主張するのは、もっと若い子供も、55から70、80と、すべての人の範囲だということです。

ハートビル法

超高齢社会、55、65、75歳から後どうするんだと意識されてきたわけです。そこでバリアフリーは法的規制の対象になりました。それがハートビル法。「高齢者・身体障害者等が円滑に利用する建築物の建築の促進に関する法律」で、1994年にできました。これが素直に通った秘密は「高齢者」という言葉を「身体障害者等」の前につけたことに尽きます。

それが通ると、2000年に「交通バリアフリー法」という同じような表現の法律が通りました。この違いは、交通は新設5,000人以上利用ということに対して義務づけをした。既存の駅については努力義務とう表現にとどまっていますが、新しくつるときには義務づけをしました。

建物は規制しなかった。1994年に導入したときには義務ではなかったんですが、交通バリアフリー法が入ると、何で交通ができるのに建物ができないのかと、改正した法律は、義務対象を大規模な建物、不特定多数等々と条件はありますけれども義務にしたわけです。ハートビル法というのは、建築基準法は変わっていないけれど、ハートビル法に適合していない、例えば大規模なデパートやスーパーマーケットは建物を建てられないということになります。不特定多数が使う建物というのはユニバーサルデザインでなければならない。交通もそうでなければならないという論理が実際にはきちんと通るといえることです。

それに対して、製品を規制することは非常に困難です。実際にユニバーサルデザインのものをつくらなければならないとしても、それが何を意味するかということは余り定かではありません。現実にもそういう意味での製品のバリアフリー化、あるいはユニバーサルデザイン化を法的に規制することは、まず考えられないことです。

ただ、法律で決めたからといってうまくいか定かではありません。アメリカでADAに基づくガイドラインをつくったとしても、いろいろな口実をつけて逃げる人がいる。建築家は、書かれていないことはやらないという傾向がございます。

そういうことを認めない。使えなければだめというのを奥底に含んでいるのがユニバーサルデザインの概念です。これはデザインセンスと深い洞察力とが必要です。だれが、どういうふうにするのかを十分に理解して、どうやれば、だれが使えなくなるかをよく考えなければいけない。伝統に従っていたときには、余りデザインミスは起こらなかったんですが、実は現在どんどん起こるようになってきています。それを何とかしようというのがユニバーサルデザインです。

都市・建築・住宅

いわゆるインフラストラクチャーに近い部分ですと、極めて多数の人が利用する、いずれは利用するという状況があります。それが特定多数なのか、あるいは不特定多数なのか、それとも限られた人数なのかというのは、その都市、建築、住宅によって違います。

ハートビル法が最初につくられたときには、不特定多数の利用の建物だけが対象でした。学校、事務所、集合住宅は対象外でしたが、改定されたときに、特定多数が使うからといって外すのはおかしいという議論が強くなり、学校も事務所も対象になりました。集合住宅の共用部分も同じように網がかかりました。

住宅のユニバーサルデザインって何かといったときに、デジタルリテラシーのレベルでは必ずしも誰もが暮らしていけるという保障はない。しかし住宅に関しては、居住者が一番使いやすいように、そこで住み続けられるようにするのが最大のポイントです。

背が高い人と小さい人とでは、使いやすい高さが違ってきてしまう。上下に高さを変更する装置を導入すれば、解決されますが、それだけではうまくいかない。トイレで言えば、右からしか乗り移れないという車いすの利用者もいますし、その逆もいます。そうすると、そういうトイレのデザインをしなければいけないわけで、すべてのトイレをあるデザ

インで規定したら、非常に割合は少ないですが、一定の割合の人が、自動的に排除されることになります。

そうすると、何がユニバーサルデザインで必要かといったら、1つしかない場合にはどちらかを選ばざるを得ない。2つ以上あれば、右と左の選択ができるようにしようということです。

消費者年齢

世の中のものを全部本当にユニバーサルデザインでつくれるだろうかと考えます。きっと可能だろうと思います。日本は超高齢化に突進しているわけです。高齢者がふえ、高齢者の平均寿命が70、いや80を超え、もうすぐ90までいくと言われていきますから、その人たちが自分が使いにくいものをお金を出して買うだろうか。

消費者層の年齢平均値は上がっています。もう1つ重要なのは、使えるお金を持っているのは誰だろうと考えます。スコット・レイズさんは、アメリカには4,000万人の障害者がいて、その人たちが使ってもいいと言っている金額が巨大な額であると話されましたが、アメリカの障害者の定義というのは日本よりはるかに広いわけです。手帳を持っている人が障害者というわけではありません。アメリカの場合には、年をとって体力の落ちた人、障害がちょっと出ているような人も、手帳をもらってなくても、障害者という定義のほうに入れてしまうわけです。

日本はそういう定義をしてこなかった。ちょっと変わり始めたかなというのは、介護保険ができて、要支援から要介護1から5までですか、その認定をもらう人は当然増えた。その多くは、障害者手帳をもらおうと思えばもらえるのに、申請はしていません。長い間のバリアフリー、障害者というレッテルが、私は健康だと思い続けたい高齢者にとってはブレーキをかけていたのです。ただ要介護認定は、本人ではなく大抵は周りが音を上げて出てきている。

ところが要介護、要支援と認定をしてもらう高齢者は、実は少数です。多くの高齢者は、多少若いときよりは歩く速度が遅くなったとか、もう走るのはいやだとか、ちょっと目が見えにくいとか、耳が遠いとほとんど全員が言っていると思います。これは当たり前だと思っているが世の中で行動しようとするとな非常に不都合なわけです。

その不都合なものをたくさん持っている高齢者は、一方でたくさんのお金とたくさん余暇時間を持っている。もう一方では、頼まれれば、社会に労働力として復帰したり、ボランティアとして仕事をする気力を持っている。もっと重要なのは、可処分所得が実は高齢者のほうが多い

かもしれないということです。今働いている現役世代は何にお金を使っているかという、教育費負担、住宅ローンです。

高齢者は可処分所得が現役世代よりたくさんある。そこにしか企業、ビジネスの将来はないと言ってもいいと思います。一番大きなマーケットは旅行であるということは皆さんよく御存じです。

もう一方で、年をとって、生活しにくいのが困るわけです。暮らしやすくない自治体は、みんなが見切りをつける可能性があります。国内で住みやすい自治体に移動したり、日本に見切りをつけて、外国のリゾートで暮らすという人も出てくるかもしれません。西洋では、生活費は安くありませんが、住宅費、食費含めて日本より安いところはたくさんあります。途上国ですと、メイドを雇っても、日本より安くて済むところはたくさんあります。高齢者は逃げる可能性があります。現役世代が払っている年金が全部外貨で流出するという致命的なことになっては困る。こうならないよう、高齢者にも住みやすい生活環境を整えなければならないという結論が導かれますが、そうは言っても物理的制約があるわけです。

アシスティブ・テクノロジー

「アシスティブ・テクノロジー」とは技術による自立支援という言葉です。本当のバリアフリー技術はこれのことだけを言うと私は思います。

スコット・レインズさんは車いすを使っている。車いすは彼にとっての足です。ユニバーサルデザインの父と言われた、亡くなったロン・メイスはポリオだったものですから、電動車いすを使って、小さな携帯型の酸素ボンベを持っていました。これらは彼の社会的生活、社会的行動を支援するための欠くべからざる道具、技術ですね。これらを実アシスティブ・テクノロジーと言います。これがなければ我々と同じ移動、我々と同じ場面での活躍ができないわけです。でもそれがあれば、同じ土俵で仕事ができる。そのためにこそ本当のお金を投入すべきです。

今までは、実はユニバーサルデザインという水準までいなくて、若い人しか使えないものを無理やり押しつけて、年をとってちょっと弱ったら、もうそれはバリアフリーに行くか、あきらめるかどっちかという、ひどい選択を迫っていた。そうではなくて、基本的に我々が会うものはユニバーサルデザインという概念を踏まえ、すべての人が使えるように意識してつくられなければならない。それだけではうまくいかない、本当の意味でのバリアフリー技術が絡んでくると申し上げます。

ユニバーサルデザインの達成

最後に、ユニバーサルデザインというのは、本質的に自分自身の問題だということです。私にだめなものはこの世の中になくと同じ、自分が使えないものは押しつけられてもしょうがないわけです。潜在的なお客さんを失って損をするのはあなただよ、というのがユニバーサルデザインの出発点であり、私自身の立場としてスタートする。

私にはOKである、じゃあ満足、と止まってはいけないのがユニバーサルデザインです。あなたもOKですか。じゃあ彼には、彼女にはどうでしょう、みんなが大体私にはOKよというのが、普通につくられていれば当たり前ですね。現実にはそれがそうではない。

最大の理由はデザイナーが相対的に若い人である。デザイナーのグループにそれ以外の視点を持った人がほとんどいないのです。いろいろ問題を抱えている人が言う「だめ」のほうが、デザインをよくするには役に立つ。そういうものを重ねることによって初めて、ユニバーサルデザインというのが少しずつ達成されるということになります。

多くの人は余り意識していない。でも、ちょっと意識を始めると、何か変だなということが見えてくるわけです。よく見て感じた結果を発言するということが重要です。ケチだけつけて、いいからと言ってほめないと、デザイナーや企業は元気が出ないとおっしゃいます。評価されればちゃんと売れる。それが企業に対する賞賛の最も単純明快なあらわれ方です。いいものは売れる。ただし、いいものなのに売れてなかったら、口コミでほめてあげるといことは重要かと思えます。

けなしたときに、こうすればよくなるという知恵を教えてあげるといのが重要です。アドバイスによって次のモデルはよくなります。これを積み重ねていくことで初めてユニバーサルデザインというのは達成される。というのが、これまで私がいろいろやってきたことによって身につけた結果です。

公開討論会 「国際的視点からみたUDの展望」

スコット・レインズ氏 / 古瀬 敏氏

司会 この公開討論会は、皆様方からいただいた質問に沿って、スコット・レインズ氏と古瀬敏教授の回答式スタイルで進行していきます。お二方よろしくお願いたします。



古瀬 ●アメリカでの障害者の旅行はどの程度まで一般化しているのでしょうか。

レインズ 障害を持つ人たちが旅行することは、極めて普通のことです。最もよく使われる移動手段は飛行機で、使われにくいものが、都市を結ぶ長距離バスです。

アメリカ人の障害を持っている人が利用したいなあと思っている移動手段が鉄道です。アメリカの鉄道は幅が広いので、車いすでも中で移動できますが、コストが高いため贅沢なオプションということになります。

私は休暇でも旅行しますし、出張の時はレンタカーを借ります。特に障害者の人でも運転できるシステムがついている車を借ります。特別な仕様の車だからといって割高な料金が設定されていないので、特に高くはありません。しかも、前日に予約しておけばいいし、場合によっては当日でも借りることができます。

古瀬 ●旅行のユニバーサルデザインについて、施設のバリア、例えば段差の解消が日本の観光地の大きな課題であるが、費用が必要であり、難しいと考えている経営者が多い。そういう人たちへのUD化への決め手の一言は何か。

レインズ 日本でも、世界で初めて、又は世界レベルのものをつくり出したら非常に違ってくると思います。日本も山が多い国ですので、環境に配慮した企画があれば、みんなも目をむくのではないのでしょうか。

古瀬 ●旅行の場合に、交通など、目的地以外のところが不便ではないかと感じていますが。

レイنز 私たちが旅行に関して研究活動をする時に、目的地の観光地開発を主眼にするわけですが、そこに行くルートも含めてパッケージでつくらなければだめだということを常に言っております。

シカゴにあるオーブンドア・オーガニゼーションという組織が、障害を持った人たちの飛行機利用を前提とした旅行のニーズ調査をしました。1,200人に調査をして、重要だと認識されたのは、車いすで移動できる環境の一貫性、もう1つはプレディクト・アビリティ、予測可能性、3つ目はアンダースタンド・アビリティ、わかりやすさということだと思います。この3つの点は、サービスのやり方によって改善ができる点です。もう1つはアダプタアビリティ、その環境を自分の障害、自分のニーズに従って変えられるのかという部分もありました。しかし、この4つの点ともにカスタマーサービスで何とか切り抜けられる問題であるという結論になりました。

古瀬 ●ADAはアメリカで生かされていますか、それとも後退していますか。

レイنز 残念ですが、旅行に関しては衰退していると思います。ADAが最初に導入されてから30年間、私たちも努力をしてきて、前進がありました。しかし、交通、観光という点に関しては、当時と同じ問題につき当たります。30年前ADAが施行されたときには、これは公民権の一部という位置づけでしたから、ADAの遵守は必要条件としてスタートしましたが、今、このADAが交通ということで見ただけの場合には、企業の利益ということと取ってかわられてしまっている形があります。ですから、今、ADAをやろうという場合に、正当な根拠となるものが揺らぎ始めていると言えると思います。

古瀬 ●非常時の対応として火災、災害、米国で事例があれば

アメリカではFEMA（連邦危機管理庁）があり、直ちに対応する仕組みを事前に準備しています。日本は10年前に阪神・淡路大震災でガタガタだったわけですね。今回の新潟県中越地震でもきちんとした形で対応できていない。10年たってもFEMAが多分10年ぐらい前にできていた水準までまだっていないということが言えます。

レイنز アメリカでは、ここ過去1年から1年半の間、その話題が非

大会を支えた人たち

常に注目を浴びていて、現在、教育も包括する新しいガイドラインができてきて、その準備の質を上げているところでございます。

古瀬 ●障害によっては、部分的にこれだけは譲れないところがあるがどのように納得したらよいか。

レイنز 全体的に理論化してお話するというのは非常に難しいことだと思います。

古瀬 ユニバーサルデザインと、負荷改変と、その上の自立支援技術という、並べ方に該当するような組み立てだと思うんです。これがなければ自分はだめだという部分については譲れないわけですか。それは自分の生存にかかわるからと。

ところが現実になると物理的に不可能な場面が出てきて、例えば、古い建物を改修するとき、ここまでは改修できる、これ以上は無理ということが起こり得るわけです。これ以上は無理だと言ってギブアップされたら、納得せざるを得ない。だけど、そこに至るまでにとことん議論すれば納得できる。議論せずに押し切られたら、多分納得しないことになると思います。

●今のとちょうど逆向きのコメントがありまして、人は皆、何らかのハンディを持っている。それを自分自身で乗り越えようとする努力をすべきではないか。

レイنز 全く同意いたします。人は皆何らかの能力的な制限があって、それを乗り越えていくことは必要だと思います。

ただ、一方で、ハンディキャップというのは、英語での正確な意味を申し上げますと、自分の能力に制限がある以上に、社会によって、環境によって制限を与えられているということなのです。そういう意味でこれは社会の側を改善していくことで乗り越えることができると、考えています。私も含めて全員が、人間として個人的な制限を、課せられているわけです。それをどのように乗り越えていくかで、私は3つのことを言いたいと思います。コミュニティ、コミュニケーション、そしてサイレンス、静けさです。まず自分の持っている与えられた制限を理解し、許容して、受け入れた上で、自分の周りの人々に助けていただくようお願いする、こういう意味でコミュニティが要素として大事になります。

次に周囲の方からの支援を得るために必要なのが、コミュニケーショ



ンです。そのためには個人的なコミュニケーションのスキル、それに関連する誠実さ、自分自身の知識を改善し、発達させていって、人々とよいコミュニケーションをとることができるようにならなければならない。

3つ目が静けさ、サイレンスという要素です。自分で自分一人にとどまって、自分をよく知る作業が必要になると思います。自分の感情的な傾向などをよく理解することができるわけです。

古瀬 既に我々のつくっているもの、我々の環境は、許容すべき範囲を越えて、全員に負担をかけているから、まず直すのが先であって、我慢して乗り越えるように努力しろというのは、今の状況を見ればそれは話が逆だと、私はお答えします。まず、私は左利きでして、世の中で随分いろんなことで不便をこうむっている。

2つ目は、極端に目が悪いんです。皆さん年をとったら、多くの人は裸眼では近くのものも全く見えなくなります。その状態を障害者とは言わないし、ハンディを持たされているとは世の中は意識していないわけです。この状態は全員なるし、不便を持っているので、それをカバーするようなデザインをしてくれるのが筋だと思っています。それをデザイナー、世の中一般はそうは思っていない、それはやっぱり違うだろうと言います。世の中を変えてから議論しろということです。

●ユニバーサルデザイン教育が進んでいる国はどこですか。そこでは具体的にどのような教育が行われているのでしょうか。

古瀬 日本は、結構やろうとしていると思います。例えば、ある教科書会社から、6年生の国語教科書にユニバーサルデザインということで依頼が来て書きました。国語、日本語を習う過程で使われるものの中に、文学があり、エッセイがあり、それ以外にもう少し社会の話を取り上げたものとして、ユニバーサルデザインをその教科書会社は用意しました。その教材に合わせて、自分たちで調べてみよう、関連した作業を国語教育の中でやるように一応組み立ててあるわけですから、ごく短時間ですが、1つの教科書においてはユニバーサルデザイン教育が、全体の中でやられるという仕組みがあります。多分ほかの教科書ではバリアフリー教育が入っていると思うので、全く無視されているわけではないと思います。

●若い世代が住宅を新築するとき、また、中年世代がリニューアルするとき、必ずしたほうがよいUD化はどのようなものがありますか。

古瀬 最低のレベルは、家に入ってトイレ、水回りまでは使えることで

大会を支えた人たち

す。ところが年をとってくると、それ以上要求されるものが身近に見えてきます。それに合わせて、使いやすいもの、必要になりそうなものを組み入れていくこととなります。設備にお金をどの位使うかに関係しません。

日本のトイレは設備的には非常にいいものを手に入れることができます。ウオッシュレット、お風呂。ユニットバスは脱衣室から洗い場は平らではいれるものが標準になりつつある。問題はお風呂場の広さ、トイレの広さ、に関してはまだ遅れている。広ければ大抵の問題を解決することができるということだけをつけ加えれば、あとはかなり世の中はできるようになっていとお答えします。

レイズ 米国のデザイナーたちが家をデザインするに当たって、将来起こり得るであろう記憶を失ってしまうという事態に備えている家をデザインする動きがあります。家の内部のデザインを理解しやすいもの、予測しやすいものとするとか、照明の明るさで感情を多少コントロールできるようにする、などの考え方です。

古瀬 ●人は加齢とともに何らかの障害を持つようになる。高齢者や障害者が活発に外出や社会参加するようになると、大切な消費者になります。障害をお持ちの方の立場から、そのためには何をすべきとお考えでしょうか。

レイズ 人は年をとるに従って、家の中にとどまりたいという傾向が出てくるわけですね。理由としては、家の中の環境ならば自分がなじんでいて問題がないし、友人もいるからなのですが、ここで大事な概念として自分が帰属できるコミュニティがあるということが大事なわけがあります。そのためにそこに至る交通手段が必要になってきます。例えば木彫、ダンス、音楽などコミュニティの活動。人々がそうした活動に参加しようという意欲が高まる、こういう意味でコミュニティがまず大切だと思います。

古瀬 ●ファッションのユニバーサル化は一体どう展開されるべきものでしょうか。

一言で言うと、おしゃれをしたい格好をちゃんとさせてくれと。ただし、そのために着にくいものはまっぴらごめんということです。

一番外側がきちんと見せたい格好になっていて、そこと体にきちんと結びつけて形を整える部分とが一体でなくてもいいのではないかと。要するに半分それぞれ個別に、独立に着られるような形になっていけば、

かなり自由に選べるのではないか。

ニューヨークのファッション工科大学はファッションのユニバーサルデザインをずっとやっています。そこでファッションショーを見せていただきました。着脱しやすいデザイン。おしゃれなアメリカの女性が満足するようなものをきちんと提案しています。やはり中と外を切り離せる。最後の形がおしゃれになればいいのだという発想の転換をすれば変わるのではないかと考えています。

●すべての人のために使いやすくした結果、悪影響が起こるというおそれはありませんか。

古瀬 もしそれをやらないと、年をとったら、きちんと運転できるのに操作が困難になって、運転をやめざるを得ないという状況が起こる。あるいは、障害があったら運転ができないということが起こりますね。それはあるべき姿ではない。むしろ、安全を担保する方法はほかにある。

今の自動車の将来は、自動運転の向に動いています。そのほうが交通事故の発生率は劇的に下がるのは、技術者はみんな知っていますから、使いやすくした結果が重大なことにつながるというおそれはあんまりないと思っています。

もう1つよく言われるのは、使いやすくすると、みんな怠け者になって、かえって体力が落ちると言われていますが、外に行って楽しむこと、あるいは働くこと、それが生活の本質なわけです。そのために途中の段階を楽にすることは何も問題はない。むしろあるべき姿だと思います。

建築に関して言えば、家の中で段差をなくすと、かえって体がなまると言いますが、家の中で段差をなくしても、街中に段差を全部なくすことなんか絶対にできやしない。幾らでもそこで訓練してくださいというのが私の答えです。

レイズ 障害を持つ者、~~又~~また今後高齢者になる私たちすべての人たちにとって最も大事なものは、選択肢があるということではないでしょうか。

ユニバーサルデザインのものに囲まれた場合に、選択肢が生まれるのです。例えば、家の中の段差を解消すると体力が落ちるのではという話でしたけれども、それは段差をなくすことによって自分は2階に上がるという選択肢が生まれることになります。また、家の中の段差をなくしたからといって、私たちが外で運動するという選択肢がなくなるわけではないのです。

大会を支えた人たち

古瀬●日本のバリアフリー・ユニバーサルデザインについてのご感想を。

レイズ 今回、初めて日本に参りまして、私は移動中、世界でも有名な古瀬先生とずっと一緒でございました。ということは、これまで非常に有利な面もあったし、不利な面もあったということでしょうか。古瀬先生がついていてくださったので、どこへ行くにもどういう選択肢があるよ、どこに行ったら何があるとすべて教えていただくことができました。古瀬先生のおかげで、私は短い滞在の間にいろんな方とお会いする機会をつくっていただきました。すばらしいことだと思います。

日本は歴史、文化、独自の価値観を持っています。また世界でも非常に強い経済的な地位を築いてまいりました。アジアで果たす役割というのも非常に大きなものがあると思います。

古瀬●スコット・レイズさんにとってのユニバーサルデザインとは何ですか。私**古瀬先生**がユニバーサルデザインに出会ったきっかけは何ですか。今後ユニバーサルデザインはどうなっていくと思いますか。

レイズ 私個人にとってのユニバーサルデザインというのは、自由(freedom)です。

古瀬 私が出会ったきっかけは、1994年にセンター・フォー・ユニバーサルデザインにロン・メイスのところを訪ねたときに、言葉に出会った。私は建設省建築研究所で**長寿社会**対応住宅設計指針案をつくって、まだ案の状態を議論している段階で彼に会ったわけです。長寿社会対応住宅設計指針は、死ぬまで住める家でなければ意味がないという立場をとってつくったデザイン・ガイドラインですが、それが見事にユニバーサルデザインという概念なのです。だから私はそれを前からやっていた。言葉が後からそれにつながったのです。

ユニバーサルデザインという言葉の前の概念そのものをいつからやってたかといえば、建築デザインに限らずに言えば、大学的时候了。大学のときに卒論で書いたのは「建築と公害」で、建物の利用者、居住者のことをずっとやってきたわけです。居住者が出発点で、居住者の立場が最初というのは、私の大学の卒論を書くときからずっと一貫しているというふうに申し上げたい。言葉は、ロン・メイスに出会ったときからです。

レイズ●ユニバーサルデザインは将来どうなっていくと思うのか
制限があるということの価値です。そこに制限があるためにたくさんの力が出るということもあります。私は17歳のとき、脊椎にがんができて、

麻痺の状態になりました。がんと解る4日前に、私はスキー・インストラクターの資格を取ったところでした。手術の2週間前、両親が私はずっと待っていた手紙を持ってきてくれました。あなたをスキーのインストラクターとして認めます。スキー学校からの招待状でした。私は思わず笑ってしまいました。少し頭で計算をしてしまったからです。私が人生の中で何をしたいと思っていたのかなど、そのときに思いました。私はとても一人の一生涯ではできないぐらいのことをやりたいと思っていました。小学校4年生のときに習った言葉を思い出しました。「無限の半分は無限だ」という言葉です。私の体の半分は動かなくなってしまいましたが、残りの半分はまだ無限の可能性があるので。それで私はまだやれることがたくさんあるということがわかりました。

ユニバーサルデザインというのは、デザインをするためのガイドライン、指針というものを与えるものです。そして新しい無限の可能性を与えるものだと思うのです。将来のユニバーサルデザインの発展を考えた場合、高齢化対応、認知科学との活用、そして、環境への配慮ということが考えられると思います。ユニバーサルデザインが人間中心の考え方に基づくならば、その反対側、相方にあるのは、環境重視、地球重視という考え方だと思います。そのどちらも欠けてはいけません。どちらかが存在するためにはもう片方が必要だという概念だと思います。これからは環境を重視し、素材、品物の選択の幅を広げて、リサイクルのこと、デザインのことも考えて、まだまだ広がっていくと思います。

古瀬 私は、デザインのあるべき姿は、「いいデザインでなければならない」だと思っています。そのために6つの必須要件というふうに組み替えたものを私は用意しております。それを達成する方向で世の中は変わっていくだろうと考えています。

6つというのは、安全性と、アクセシビリティと、使い勝手、経済妥当性、価格妥当性、それから持続可能性、そして審美性です。彼が言った環境というのは持続可能性に当たります。安全でアクセシビリティがあ

あって、使い勝手がよくてというのは、人間のことを考えたデザインという立場かと思っています。最後に審美性、美しさがあって、初めてそれで全部そろおうと思っています。以上です。どうもありがとうございました。
(拍手)

